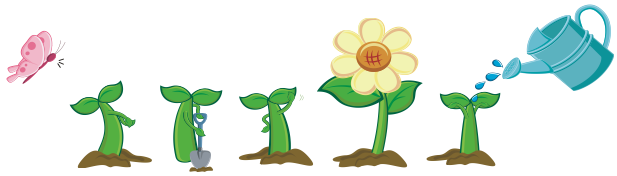
平成29年度 多文化共生セミナー



外国につながる子どもの発達障害をどう捉えるか

～大人の役割と子どもの未来～

報告書

日時：平成 29 年８月 24 日（木）14 時～16 時
場所：つづきＭＹプラザ 多目的室１・２

主催：都筑多文化・青少年交流プラザ
（つづきＭＹプラザ）
後援：横浜市教育委員会

＊講演の内容をセミナー当日の録音を基に作成いたしました。配布資料については、誌面の都合上、一部割愛しております。

■はじめに

（つづきＭＹプラザ館長 林田育美）

皆さまこんにちは。つづき MY プラザ館長の林田でございます。いつもご協力、ご理解をいただきまして、誠にありがとうございます。また本日は多文化共生セミナーにご参加いただき、御礼申し上げます。

今日は「外国につながる子どもの発達障害をどう捉えるか、大人の役割と子どもの未来」と題して開催いたします。子どもの発達障害は、今ではとても身近なこととなっています。ですが、外国につながる子どもの発達障害となると、文化の違い、特に、言葉の違いを抱えつつ考えていかなければなりません。あわせて、外国人保護者の理解の難しさなどそういった課題もあるかと思います。様々な観点から捉える必要がございまして、本当に容易なことではないと思っています。今日は、特定非営利活動法人アジャスト代表理事の清長豊先生を愛知県からお招きいたしました。発達障害の捉え方を教えていただき、私たち、大人にできることを共に考えてまいりたいと思います。皆さま最後までどうぞよろしくお願いいたします。

【司会】

本日の流れですが、前半は、清長先生にお話をいただきまして、後半は「子どもたちの未来をともに描こう」をテーマに、皆さまと意見交換をしたいと思っております。質問などがありましたら、その時にお願いいたします。では早速ですが、「外国につながる子どもの発達障害をどう捉えるか、大人の役割と子どもの未来」と題しまして、清長豊先生にお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

■第一部　基調講演

『外国につながる子どもの発達障害をどう捉えるか
～大人の役割と子どもの未来～ 』

講師：清長　豊先生
家庭療育 Sophie 指導員 / 療育コンサルタント　特定非営利活動法人アジャスト代表理事
県特別相談員（岐阜）　岐阜県公立小学校教員　理学修士（京都大学）

皆さんこんにちは。日本語指導が必要な児童生徒数ナンバーワンの愛知県からナンバーツーの神奈川まで、今朝、車で出てきました。特定非営利活動法人アジャストの清長豊といいます。

清長 豊 先生

今日は、私が今取り組んでいる課題の外国につながる子どもたちの、特に発達障害をどう捉えるかということで、最近この話題がやっとあがってきてですね、このテーマについて人前で話す機会が増えてきたので、今わかっていること、あと指導者に何ができるのかということを中心にお話をさせていただきたいと思います。

最初に自己紹介です。僕は心理の専門家なんですけど、ある研究でこういうのがあって。先行研究で目の前でしゃべっている人がどんな人かっていうのがわからなければ、人って途中でその人がどんなにいいことを言ったとしても頭に残らないというものがあるんですね。僕のこと知ってくれている東海の方ならいいのですが、こういった遠方に来るときには、ちょっと丁寧に自己紹介をするようにしています。

実は、京都大学で発達障害のことを研究しようと思って研究の世界に飛び込んだわけではなかったんです。最初おサルさんの研究をしたいと思っていました。歌を歌うおサルさんがいるんですよ。テナガザルなんですけど。テナガザルの研究をしたいと思って、京都大学の門を叩きました。インドネシアのそのテナガザルが歌を歌うんですが、デュエットで歌うのでおもしろいなぁと思って入ったんです。

海外のおサルさんの研究だったので、研究費の関係で渡航まで少し待たなきゃダメだったんですね。その時に、先輩が同じ研究室で自閉症の子の読み書きの研究をしていたんです。ちょっと手伝えよ、ということで手伝い始めて、ニホンザルの研究は日本でできるので、その研究を５日間、自閉症の子どもの研究の補助みたいなことを２日間やってたんですが、非常に自閉症の子の研究が面白くて、３ヶ月くらいたったら、人の研究が４日で、サルの研究が３日になっていたんです。いざ渡航するという半年後には、人の研究ばかりするようになっていました。それで教官に、さあ海外行くぞと言われたときに、「ごめんなさい。一生人の研究します。」と宣言して、それからずっと人の研究をしています。

今学校の先生もしているんです。なぜ学校の先生をしているかと言うと、ずっと人の認知の研究をしてたんですけど、ある縁がきっかけで 岐阜県の可児市というところが、学校で研究してみないかという話を研究室にくださったんです。しかもそれが、外国の子たちの研究だったんです。ずっとそれまでは、読み書きが苦手な子どもの日本人の子の支援をやっていたんです。やってみないかという話が来た時に、おもしろいなぁと思ったら止まれないタイプなので、「誰かや

る？」と言われたときに、「はいはい！やります。」と言って僕がそのまま教員、要は現場ですね、現場で研究するようになったんです。

現場に入ると、非常に面白かったのが、学校の先生のお仕事なんです。日本って、学校って、あまりいいイメージが無かったんですけど、いざ一緒に先生たちと働いてみると、こんないい仕事はないなと思い始めて、そうすると、やはり我慢できなくて、一年後に教員免許をとって、研究所を辞めて、次の年に学校の先生になっていました。

今は NPO 法人を中心にやっているんですけれど、それは学校の先生をやっているかたわら、平日にこうやって教育講演会とかをさせていただく機会が結構あったんです。お話をさせていただくときに、お話が終わった後に個別の相談会みたいになるんですよね。学校の先生にもいろいろ相談をいただくんですけど、その時にお母さんたち、保護者の方の相談が実は結構多くて、それがまた深刻だったんです。これをどうにか支援したいなぁと思って、家庭療育という言葉がよく出てきているんですけど、療育と言うのは基本的には子どもの認知特性にあわせた教育的な介入だったり、そういう子どもにアプローチしていく方法なんですけど、それを専門家が家に派遣されて、家で子どもにアプローチをしていくという事業をしています。

そうすると、お母さんたちにもその後にアドバイスができるんですよ。家でアドバイスをするとお母さんの悩みってどんどんどんどん出てくるんですね。そうしながら、親子を含んだ支援というのを今中心にやっています。ちょっと詳しくお話をすると、こんな感じです。「訪問型で子どもと親の支援をしています。簡単に説明すると子どもとお父さんお母さんの家庭教師です。」こんな言い方をします。

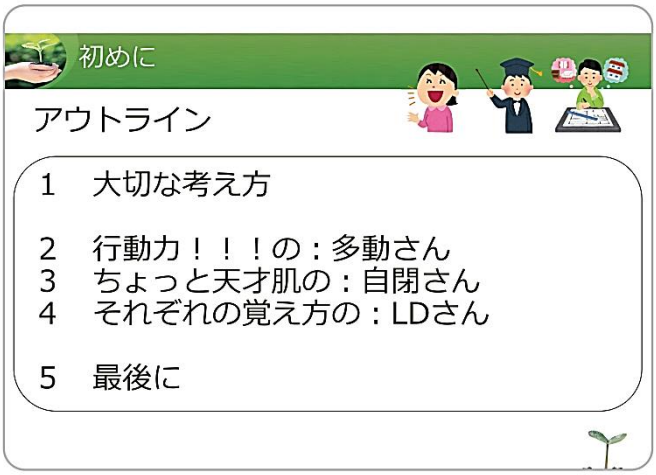
特に保護者の方に、あんまりスポットライトがあたらないんですけど、「障害のある子」という話をすると、皆、子どものことばかり気にしますが、実は障害のある子のお母さんお父さん、お母さんかな、お母さんの精神疾患のリスクって通常の女性の 10 倍くらい高いんですよ。これがあまり話題にあがらないので、非常に心配な子というか、心配な方が多いです。僕が関わったケースの中で、２ケース、保護者の方を病院につなげたというケースがあります。国籍は問わないです。

あとは ICT 教材の活用と開発、今日時間があれば普段使っている教材をちょっとお見せしようと思うんですけど、それもやっています。それから小中学校の巡回訪問で、特に岐阜県で登録されている特別支援の専門家みたいなリストがあってですね、僕はそこに登録しているので、学校からオファーがあれば、巡回指導できるんですね。だいたい秋ぐらいにいつも学校をまわって、通常級にいる外国につながる子どもたちの様子を見させていただいて、課題がある子どもに対しては、担任の先生にどうやって支援をしていくかというアドバイスもさせていただいています。

これは資料に載ってないです。個人情報に関わるので。僕が去年関わった子どもたちのほんの一部を挙げました。こういう子どもたちを見ているんです、という一例で挙げたんですけど、ここに学校とか家庭とか書いてあるのは、学校とか家庭とかの間に入りながら、学校とも連携しながら支援をしているという感じです。赤で書いてあるのが、病院の診断名のある子ですね。知的障害とか重度的とか書いてありますけど、黒の子は文科省の言い方で言うと、発達障害、またその可能性のある子どもたちという言い方をされる子どもたちが、この黒だけの部分の子どもたちですけど。おもに学力不振の子たちが結構多いです。学力不振の子たちの中で、特に家庭で三角ってなっているのは、親の理解も低い。学習障害の子どもたちでも、親もサボっていると思い込んでいる。そういう子たちの所に、保護者の家庭教師として、子どもはこういう困難さがあるんだよというのを伝える仕事と考えています。

で、今日、うちの奥さんを連れてきたんですけど、それはアジャストでやっている家庭療育 Sophie、障害のある子、その可能性のある子の支援プラス教室を構えて、外国につながる子とかの高校進学支援をしています。なので、この中にも障害がある子って実はいるんですね。ここはうちの副代表がメインでやっていますけど、奥さんですね。何かこう、この子課題がある

んだよというときには、僕が相談を受けるんです。僕がこの子に対して、こうアプローチしていけばいいんじゃないと言いながら、ユニバーサルデザインを意識した事業というのをやっています。というのが今の僕の活動です。



今日は、その中で発達障害とその可能性のある子、特に外国の子どもたちをどう捉えていくかということ。まずそのベースとなる考え方、何かこういう話をするとですね、明日からどうすればいいんですか、って話、結構いただくんですね。こういう子のこういうのがあるんですけど、どうしたらいいんですかと。確かにそれも大事なんですよ。テクニックの部分でね。知識とかテクニック。でも、実はベースとなる考え方がすごく大事だよ、というのを最近いろいろな先生方が言っていて、今日はそこのお話もしつつ、スタートに多動系 ADHD、自閉さん、LD さんということで、それぞれの代表的な特徴を挙げて、その支援方法をちらっとお話をして、あと資料には載っていないんですけど、実際に、僕が去年見た子どもたちの中での事例案みたいなものも共有していこうかなと思っています。

こういうテンションでずっとしゃべっていきますので、眠たくなるかもしれないけど、がんばってくださいね。なんなら、途中でスクワットしていただいても全然かまわないので（笑）。

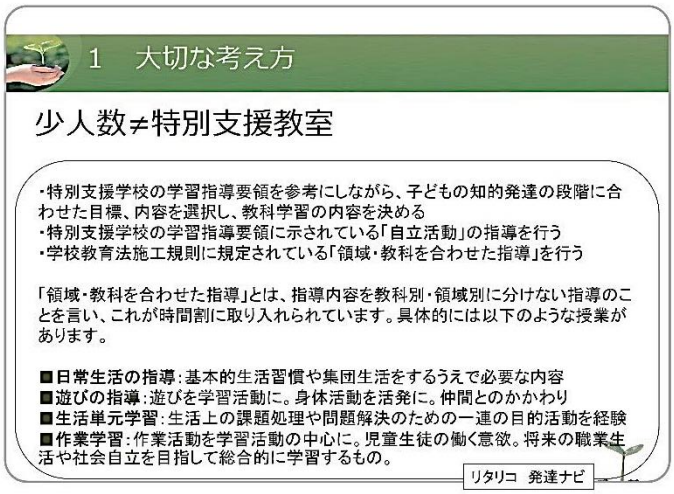
外国につながる子どもの相談とか、お母さんお父さんと話す機会が多くなってですね。その時に僕が印象的だった言葉がこの言葉なんですね。「マフィアみたいだ。」誰が、誰に言った言葉なのか。これは、ブラジルのお父さんが学校の先生のことを、マフィアみたいだって表現されたんですね。僕は、非常に印象的だったんです。

僕も学校の先生をしていたんで、通訳の先生にも入っていただきながら、いろいろお話をしてたんで、わかり合っているつもりだったですけど、僕が関わりあったケースではなくて、他の学校のお父さんお母さんがどうしようかと困って、あるブラジルの方たちがやっている NPO を通じて僕の方に相談を受けたケースでした。学校で関わった保護者の方ではないんですけど、この言葉を聞いた時、割と衝撃的だったんですよね。「なんで？」ってお父さんに聞いてみたんです。お父さんに言われたのは、「学校の先生は子どもたちのことをなんだか学校の中で、こちょこちょ相談をして勝手に決めちゃう。で、こういうのになりましたって、ボンって僕たちに言ってくる。それがマフィアみたいだ。もっとオープンにして、僕たちにもっと相談をしてくれて、もっといろいろ言ってくれたらいいのに。でもそれがないから、勝手に決められちゃうんだ。」っていう話をされてたんです。

で僕自身、けっこうオープンにしゃべっているつもりだったんです。僕が対応してないんですけど、でも、ここのお父さんも通訳の先生がいる学校でしたし、おそらく通訳の先生が入って、担任の先生と話されていると思うんですけど、それでもこういう印象を受けられるんですね。だから、あのう、もっとこう、密に連携を取る必要があるのかなというのを、すごく感じたんです。

そこの一例で、もうちょっとお話をしていくと、僕は特別支援教育の専門家です。特別支援教育の専門家

として学校で研究するようになって、学校の先生になった時は、外国につながる子どもたちの初期指導教室と５、６年生の教室を担当することになったんですね。いろんな子どもたちをみてきて、学校の中でのいろんな子どもたちをみることによって、非常に気になったのが、学校の中で適応に困っている子どもがいたとします。それはブラジルだったり、フィリピンだったり、ペルーだったり、いろんな国籍の子どもなんですけど、ちょっと通常級では難しいよっていうのを保護者の方に説明をしていく場面というのがあるんですね、どこの学校も。その時に、特に外国につながる子どもたちの先生で、捉え方がちょっと心配な方がけっこういらっしゃるんです。

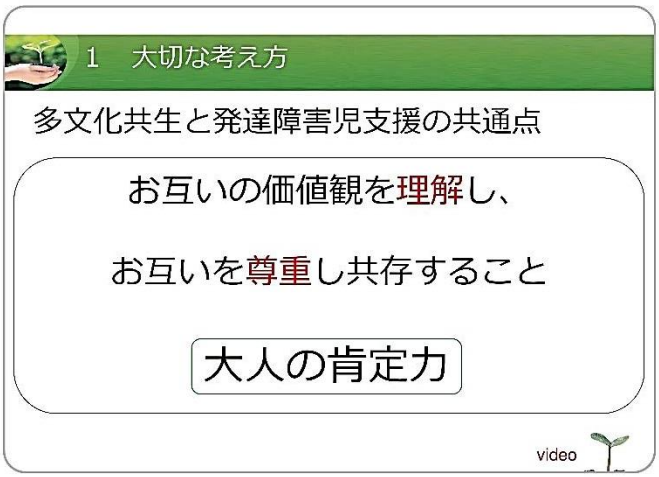


ここの地域はどうかというのは知らないですよ。僕はあくまで愛知県です。で、岐阜県と愛知県をよく知っているんですけど。外国につながる子どもの支援の先生が保護者の方に説明をする時、特別支援教室に入ったほうがいいよっていうのを勧める時に、よく、少人数で勉強を教えてもらえるから、みんなの勉強に追いつくために入った方がいいよっていう言い方をされる方が非常に多いですね。僕はこれがすごくドキドキするんです。特別支援教育の先生たちが怒りださないかなって思って、ドキドキするんです。

地域によっては、多くの先生、特に外国につながる子たちの先生が、特別支援教室のことを、少人数教室とほぼ一緒だと思われているケースが多いんです。個別に見てくれるからっていう説明しか保護者の方にしないケースが多いんですね。でも、先生たちに「特別支援教室って少人数の教室とはまた違うんだよ、何やっているか知っている？」って聞いたら、説明できないケースが非常に多いことに気がついて。最近ちらっと載せたんですけど、特別支援教室でどういうことをやっているのか。

たとえば説明されるのは、子どもの個性に合わせた、要は、特徴に合わせた支援ですね。プラス、ここですね、「知的発達の段階に合わせた目標、内容を選択し、学習の内容を決める」から、勉強できるようになるからね、みたいな説明をされる方が多いんです。プラス日常生活の指導だったり、遊びの指導だったり、生活作業の学習だったり、作業学習だったりいろんなものが入ってくるんですよね。プラス、これが中学校になっても続くんですよね。よくあるケース、トラブルになるケースが、小学校の時にこの子は勉強が難しいから、きめ細かく見てもらえるから、特別支援教室に入った方がいいよって勧められたブラジルとかフィリピンとかの外国につながる保護者の方が中学校になった時に、また中学校でも、ここの内容が入ってくる、もうちょっと多かったりするんですね。そうすると、話と違うんじゃないかというふうに、トラブルになるケースが、実はけっこうあるんですね。

僕が去年見ていた子どものケースですけど、中学校の特別支援学級で、２学期の英語の授業、英語の単元という意味ではたぶんあったかもしれないですけど、英語の授業があったのは１時間だけだったよって言ってました。あとは、違う科目に変わったよって。でもそれは、小学校の勧めた先生は知らなかったりするんですね。保護者の方にこういう印象を持たれないように、あくまで一例なんですけど、色んな説明を事細かくしていく必要があるのかなと考えてます。何回も言いますけど、ここの地域はこうかどうかというのは、わからないですよ。（笑）それは、言っておきます。



もう一つ。ここからは、ベースとなる考え方なんですけど。特別支援教育と多文化共生というのは、よく似ているよねっていう話が出てくるんですけど、どこが似ているのかなって考えた時に、多文化共生の考え方なんですけど、お互いの価値観を理解し、お互いを尊重し、共存することが大事だよって言われるんです。

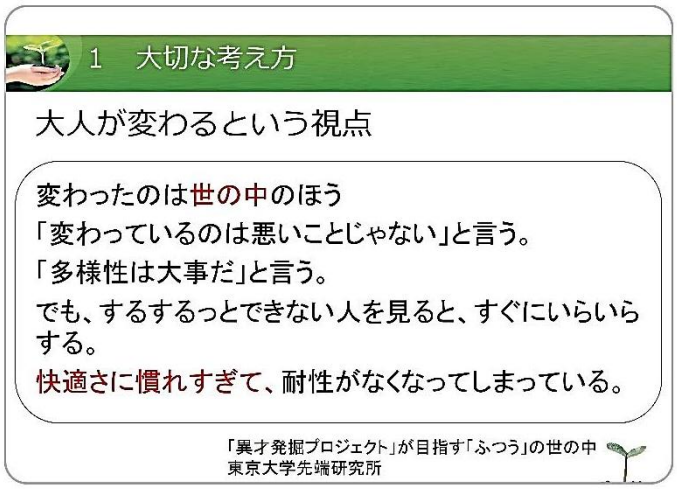
発達障害児の支援に非常に大切なことなんですね。これは子どもを変えようとする視点ではなくて、肯定する視線、視点というものが非常に大事になってきます。ちょっとビデオをお見せするので見ていただけたらいいかなと思います。音はないので、この文字だけで見てください。（Dear teacher～　ビデオの音声　）このビデオは学習障害の子どもたちが先生たちに向けたメッセージビデオとして作られているものです。有名なものなので、ご存知の先生もいらっしゃるかもしれないです。子どもたちのメッセージビデオなんですけど、おそらく作っている方は僕みたいに発達障害の専門家の方だと思います。で、大事なのは、あのメッセージの中に子どもたちを変えようっていう視点はあんまりなかったんですね。先生にこうしてほしいっていう子どもたちのメッセージだったと思うんです。どうしても子どもに教える場合に、子どもを変えようってすごく思っちゃうんですけど、特に発達障害っていう、障害って名前がつくものは、なかなか変わろうとしても変われるものではなかったりするわけです。でも発達障害の子って、見てわからないですね。パッとみてわからないんです。

例えば足の不自由な方で車椅子に乗ってる方に「がんばれば歩けるからなんとか歩けるようにしろ、がんばれ、がんばれ」と言ったところで難しいですよね。それは倫理的にも反してます。発達障害の子にもそれがあって、目には見えない、普通の子に見えるんですけど、しかし、先天的な脳の機能障害だったりして、難しい場面が出てくるんです。障害っていう名前がある、もしくは可能性があるんです。その子たちに「がんばれ、がんばれ」とか変えようとする姿勢は、もしかしたらさっきの車椅子の方に、ただ「がんばれ、がんばれ」って言って歩くことを強要していることと近いことかもしれないっていうことを常に頭のどこかに置いて、僕の場合は子どもに接しているんです。

もちろん難しいことってたくさんあるんですね、この発達障害のある子って。でも、その子たちをどうにかしてよく変えようとするんじゃなくて、むしろ「そういうところもあるけど、あなたはこういうところもあるよね。こういうところは、いいところじゃん。」っていう肯定の部分をどんどん増やしていってあげないと、非常にしんどいです。例えばですね、さっきの子どもの「体を動かしてないと先生の話を集中して聞けないんだ。」僕が見ている子の中でたくさんそういう子いるんですね。で、その子たちにとって、座ってるっていうのは先生の話を聞こうとする時に非常にネックになってくる状態なんです。だから歩いた方が先生の話が聞けるんです。だから学校の授業で、ある子どもの場合に、僕が授業をしているときに、「いいよ、うしろについて。先生のあとに、ずっとついてな。」って言って、授業中、ずーっとうしろにその子がいる状態で授業してたことがありました。

えっと、今教えることはその子に授業の内容を理解してもらうことだと思うんです。その時の場合は、決して座ることを練習するためではなかったんです。当時、あの時確か国語の授業だったんですけど、今自分がその子に教えたいのは国語なので、座ったがために国語の内容を理解できないのであれば、立って先生の話を理解してくれた方が、よっぽど僕の教えたいことを理解してくれるわけです。だから、その子を変えた上で勉強を教えようとするのではなくて、今ある状態で、どうやってその子に今自分が伝えたいことを伝えていくかっていうところを、常に考えてほしいと思います。なので、今日やることは、どちらかというと先生にお願いすることが結構メインになってくるんで

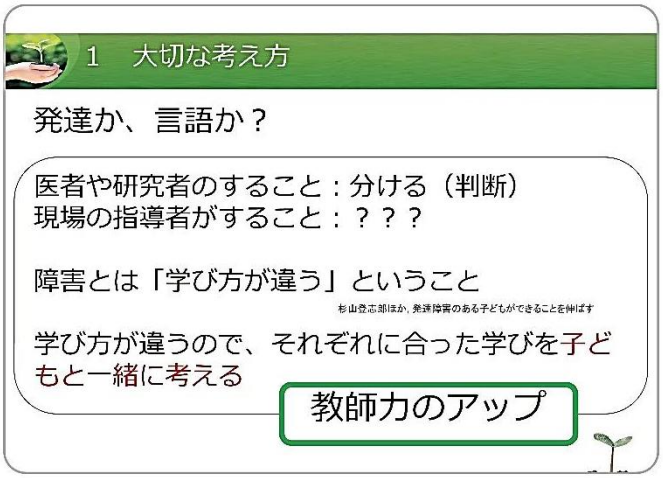
すけど、是非聞いてください。



それからちょうど関東なので、これ東大の先端研究所にこういう子どもたちを支援しているプロジェクトがあるんですね。そこの先生がこういうことを言われてます。「子どもを変えるんじゃなくて、大人を変えるっていう視点が、実は大事なんだよ。」って。で、発達障害の子が増えたってよく言うじゃないですか。でも、この先生はどうも違うんじゃないのって言われてるんですね。僕も実はここすごく思うんです。「変わったのは世の中の方だ。変わってることは悪いことじゃない。」ってみんな言うんですよ。で、「多様性も大事だ。」って大人も言うんですよ。でもね、できない人見るとイライラしちゃうんです。

ある学校に巡回訪問に行った時に、ある担任の先生がこういうことを言われて。「すごくイライラする。あの子全然覚えない。腹が立つ。」ってすごく言われてるんですね。その子、学習障害の子だったんですけど、 学習障害、発達障害の子って、要は言い方を変えると「熟達の障害」って言われるんです。「うまくできにくい障害。うまくなりにくい障害かな。」っていう風に言われるんです。だから、なかなかスルッとできないんですよ。で、教える側はすぐイライラしちゃう。それは大人が快適さに慣れ過ぎて耐性がなくなってしまっているからです。

例えば、ボタンを押せばロボットクリーナーが床掃除してくれるんですよ。ポンとボタン押せば洗濯機で乾燥までしてくれるんですよね。そういう環境の中で、実は大人が待てないんです。僕、お母さんお父さんたちによく言うんですけど、「待ってくださいね」。担任の先生にもよく言うんですけど「子どもたちに教える時に絶対待ってくださいね。一回深呼吸入れてください。」っていつも言うんですけど、そうしないと子どもたちのいい芽を壊しちゃうんですね。なので、実は、変わらなきゃダメなのは、こちら側なんだっていうことを考えながら関わるっていうのがとても大事です。



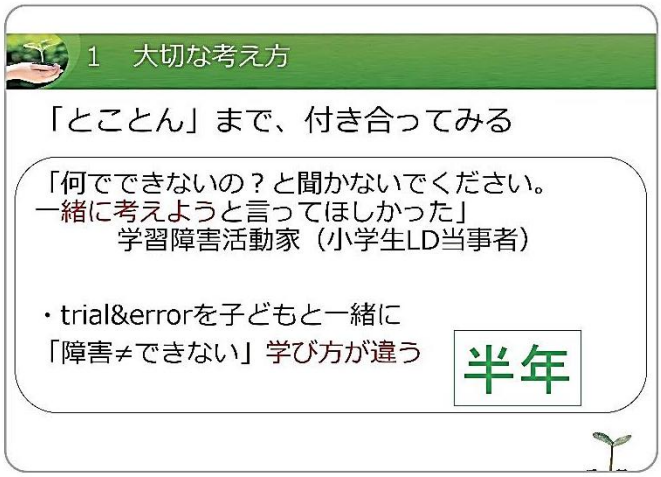
あとは言語と発達っていうのは、外国につながる子どもたちの場合よく出てくる話題なんですよね。で、「この子は、言語の問題なんですか、発達の問題なんですか。」ってよく言われるんですけど、これね、非常に難しいのは言語なのか発達なのかって判断するのは、僕はお医者さんとか研究者のする仕事だと思うんです。ただ僕も含めて現場の人間は何をすればいいのかっていうと、判断するとか分けることではないと思うんですね。その子のことを考えて、ダイナミックアセスメントっていう考え方なんですけど、教えながらその子が得意なところ苦手なところを判断して、その子が勉強していくプロセスを考えながら次につなげていくっていう考え方なんですけど、現場の指導者がすることは判断する、分けるじゃなくて、むしろ知ることだと思うんです。

子どもについて知って、子どもに適切な学習を判断してやっていく、っていうのがすごく大事だと思うんです。ある研究者が「障害とは学び方が違うということだよ。その学び方の違いを一緒に見つけてあげてほしい。」という言い方をされているんですね。

で、これは外国につながる子どもたちだけの話でもないんですけど、ある担任の先生が「この子すごく対応に、適応に困ってる。」と言って、いろんな努力を

されて、その子がクラスでやっていけるようにいろんな手立てを打たれるんですね。でも、その後病院に行って、病院で自閉症スペクトラム障害だっていう診断名を受けたとたん、先生は何していいかわからなくなる、手立てを打てなくなるっていう状況があって。でもね、その子は診断名はついたんですけどその子自身は変わってないんですね。だから、先生がその子を支援されてたことは決して無駄ではない。プラスの情報が増えただけで、関わって、もっと一緒に知っていくことが大事だと思うんですね。

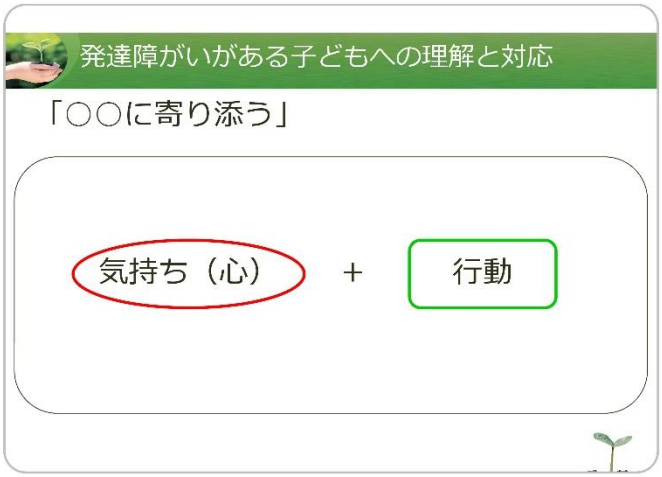
そういうことで言うと、僕は、言語か発達かっていうところは、今後医者とか研究者に期待して、僕らがやることは、この子を見ていくことだと思うんです。で、一緒にやっていくことだと思うんですね。そうすることで、先生たちの教え方も指導力もアップしていくことを信じています。



実際に学習障害の子で、プレゼンをやった子がいて、その子が発表の中でこんなことを言うんですね。先生たちに向けたメッセージなんですけど、「なんでできないの、ってずっと言われてきて悲しい思いをしてきました。なんでできないのかわかってたら、僕たちできてます。でも先生たちは『なんでできないの？』って言う。そうじゃなくて、一緒に考えようって言ってほしかった。」っていうことをこの子が言ってるんですね。

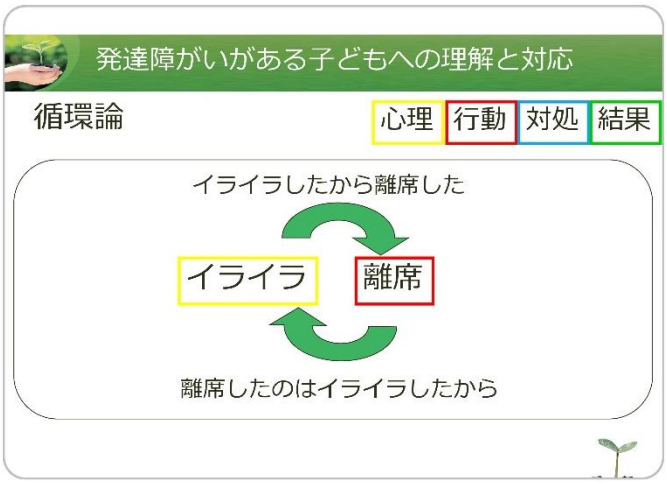
ここで大事なのは、専門知識とかテクニックとかじゃない。そういう話は出てこない。「一緒に考えてほしかった。」って言ってるんです、子どもたち。まずはここが一番大事なんです。テクニックでも知識でもなく。プラス、待つ姿勢っていうのがとても大事になってきます。あとは、待つ姿勢でいうと子どもと一緒に勉強していて、とことんまで「こういうやり方してみようか。あ、ダメだった。もしかしたらこんなやり方あるかもしれない。あ、ダメだった。」とういう風に繰り返しながら子どもと一緒にトライしてみる。学び方を見つけるまで、子どもといっしょにやっていくというのがすごく大事かと思います。

こういう話しをすると、「やってみました、先生。でも全然できないんです。」っていうのを相談されることがあるんですけど、「どれくらいやりましたか？」って言うと「３週間くらいやったんですけど、先生、子ども全然変わらないんです。」って言われるんですけど、お母さんお父さんたちに言うのは、「半年くらいはかかるな。我慢してね。お母さん、お父さんたち待ってね。」っていう言い方をするんです。僕はね、やっぱり障害って軽いものではないので、いろんなものを試しながら子どもと一緒に勉強して行きます。すぐには結果出ないです。半年や一年経つと子どもって成長してるので、そこをすぐに判断しないで、待ちながら子どもと一緒に学び続けることが非常に大事になってきます。



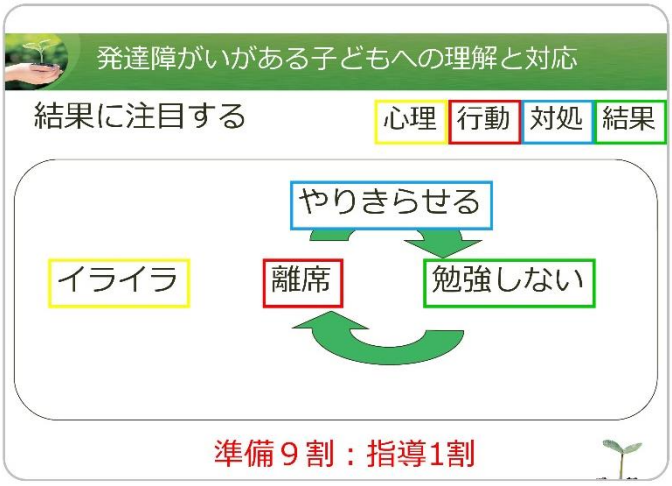
この後ちょっとテクニカルな話をしていきます。僕、教員になった時に、気持ちに寄り添う、心に寄り添わなきゃだめだっていうのをすごく先生たちが言われてたんですね。障害のある子たちに、もちろんそれも大事なんです。でも僕、もう一個大事だと思っている視点があって、それは何かっていうと、「子どもに寄り添う」っていう視点が非常に大事になってくるんですね。先生たちのいろんなディスカッションを見てると、僕ちょっと気になる場面があってですね。で、こ

この視点を入れて関わっていきませんか、っていう点を何回かさせていただいたことがあるので、今日ご紹介させていただきます。

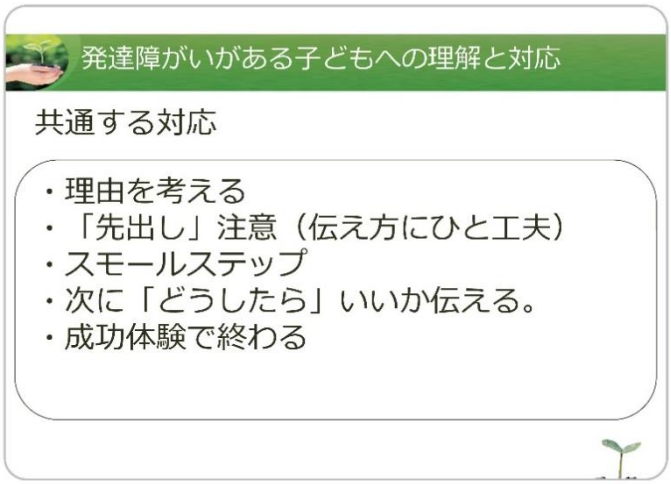


「心理学のわな」っていうんですけど、何かっていうと、その子が離席しちゃった理由を先生たちはこう考えます。気持ちに寄り添う視点で見ると、離席したのはイライラしたからだというふうに、原因で説明するんですね。イライラしたから離席した。確かにこういう流れなんですけど、逆もあって。離席したのはイライラしたからだっていうふうに、説明がぐるぐる回っちゃう。こういうのを循環期っていうんですね。これでは、答えが出ないんです。どうしたらいいのか、答えが出ないです。無性にイライラしてしまうことはあるんですよ。そのことをストップすることは、なかなか難しいですね。僕はそのときに、こういう視点が必要ですよっていうのを学校の先生に話します。それは「結果に注目する」っていうことです。離席した時に子どもはどんな結果を得たのか、というところに注目するんですね。これはあくまで例ですけど、全員がこの結果があるから離席するわけではないですけど、何かこういう状態にしたい、離席した結果、勉強しない時間が生まれてきたんです。離席した結果、先生が「なぜ立っているの？」って、いうふうに注意する。注意した時間子どもは、勉強しない時間を得ているわけです。それで、離席する行動が増えていた、っていうケースがいくつかあるんです。この「勉強しない」っていう結果を無くしてあげればいいのです。

僕がよくやるのは、横についてやり切らせる。子どもが立ちそうだなっていう時に、横について、「なあ」って言いながら教えるんですよね。そうすると、離席



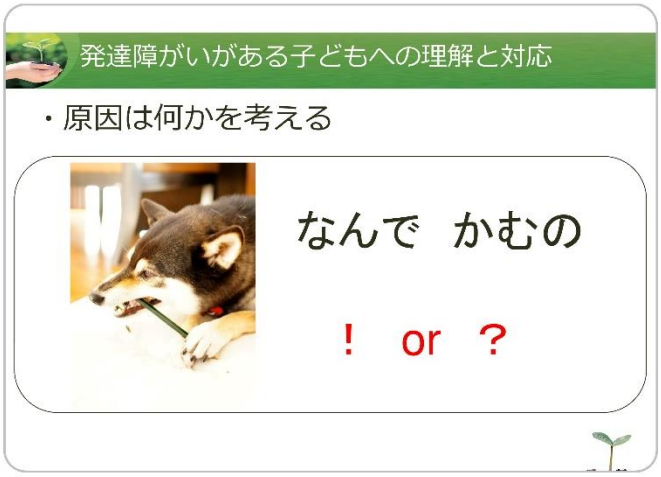
っていう行動にいかないですよね、やり切らせると。このやり方を何回かすると、ここが断ち切られて、横に立たなくても、離席するっていう行動がグーっと減っていくんです。こういうサイクルがあって、グーッと増えたのは何かっていうと、今まで離席したら勉強しない結果が生まれていたので、子どもは立ちますよね。ただこの手だって、やり切らせるっていう手立てを打つとですね、子どもは離席できないわけです。普段やっていたことが、結果が得られなくなるわけです。



どうするかっていうと、最初ちょっと離席の頻度が増えるんですけど。例えていうと、テレビのリモコンで、10 押すと 10 チャンネルに変わりますよね。でも、たまたま 10 を押してもチャンネルが変わらない場合、皆さんグーって強く押さないですか。あれと一緒です。やったときに同じ結果が得られない時、ちょっとその行動が強く出るんです。「消去バースト」っていうんです。「消去バースト」の大きいパートに、それでも治療者側がやり切らせるっていう一例なんですけど、やり切らせた場合、もうその「消去バースト」を越えると、子どもの離席の頻度は減っていく。こういう結

果に着目したアプローチの仕方があるんですね。

やり切らせるっていうのが非常に大事なんですけど、大事なのが、やり切らせるための内容。これも、スモールステップになっているかとか、実際にやり切らせて大丈夫だとか、いろんなところを考えながら、僕だと準備に９割くらいの時間を割いて、指導はとにかくやり切らせるっていうことのみ頭に置いて指導しています。こういうのがとっても大事です。これは、勉強以外の部分でもいろいろ応用できるので、もし興味があれば、応用行動分析っていう学問の考え方なので、ぜひ、書籍を見るなり、僕に聞いていただければいいと思います。



もう一つ、いろんな人と共通する行動についてお話ししていきたいと思います。最初は理由を考える。子どもの行動について、さっきは結果に注目して、って言いましたけど、その問題行動は、どんなきっかけで起こっているんだろう、そっちに注目するやり方もあるんですね。それについてお話していきます。理由を考える。皆さん、鉛筆を噛む子どもっていないですか。こう、鉛筆を噛む子どもって、僕もよく相談されるんですよ。保護者の方だったり、学校の先生だったり、いろいろ聞かれるんですよ。その時に最初に答えるのが、「先生、僕に聞く前に子どもに理由聞いた？」って聞くんですよ。先生に「えっ？」っていう顔をされることが、けっこう多いんです。

僕よく言うんですけど、その子に「何でそんなことするの？」っていうのを、子どもが噛んでいる状況で、「何で噛むの！」っていうビックリマークで言うか、「何で噛むの？」って聞くかで、子どもの対応が全く変わってくるんですね。僕は割とスッと聞いちゃう方なんで、子どもに「何で噛むの？」って聞いたことがあるんです。そしたら、子どもがこう言ったんです。「先生、鉛筆の匂いが好きなの。噛むと木の匂いがすごくするでしょ。だから私、噛んでいるの。」って言うんですね。「ああ、そうなの。だったら勉強する時は普通に勉強して、噛みたくなったら鉛筆削りの箱、匂ってきな。そしたら匂えるじゃん。」「ああそうか。先生、わかった。」って、その後勉強し始めるんですよね。それも聞かなきゃわからないですよ。

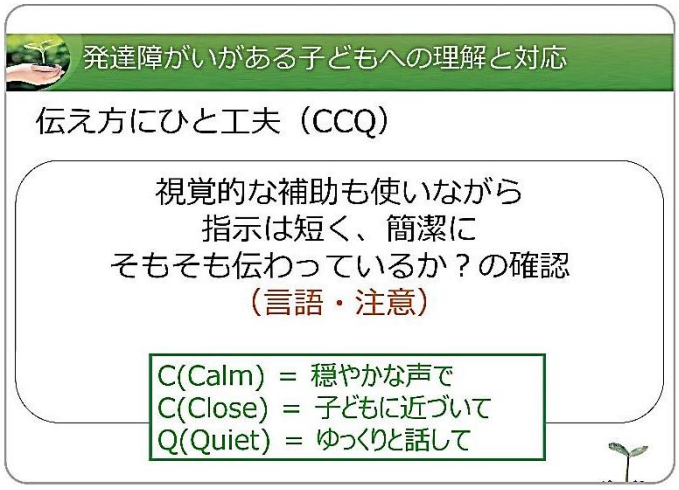
いつも子どもにビックリマークで対応していると理由が解らないですよね。子どもって聞くと、案外教えてくれるんですよね。で、割とこれ、けっこう大事なんで、ぜひその特定の行動をしている時に、通訳の先生に間に入っていただいて全然かまわないので、「何で？」って一回聞いてみてください。子どもって教えてくれると思います。

もう一つですね、「先出し注意」って僕はよく言うんですけど、特に外国につながる子どもたちは、なかなか言葉の面でも伝わらないことが多いので。あと、発達障害がある子はなおさらなんですよ。その子たちに視覚的に見て、一発で分かるようなルールを先に示しておく。活動の前に示しておく。なんならそれを、机、教室の壁とかにずっと貼っておきながら、子どもがいつでも確認できる状況を作っておくってことは、すごく大事です。

僕の見ている発達障害、その可能性のある子どもたちなんですけど、ずっと同じ困り感があるわけじゃ、実はないんですね。ずっと、同じ失敗をするわけでは

ないんです。不安感によって結構左右されるんですね。不安なときほど、その困り感っていうのがドーンと出やすかったりするんです。僕、このルールを示すっていうのが、子どもって、やっぱり失敗するのって怖いんです。だから、まず言葉よりも、こういう視覚的に示してあげます。あと、「もし忘れそうになったら、ここに貼ってあるから見てね。」って言うと、子どもってそこでだいぶ安心できるんですよ。

高学年になると、一回で聞かないとダメです、みたいなルールが学級の中にあったりするんですけど、聞かなくても、見れるよって言う状況にしておけば、子どもの不安感もなくなるわけです。失敗も減ります。かつ、見れるような、視覚的にパッとわかるルールを示しておくのは、すごく大事です。



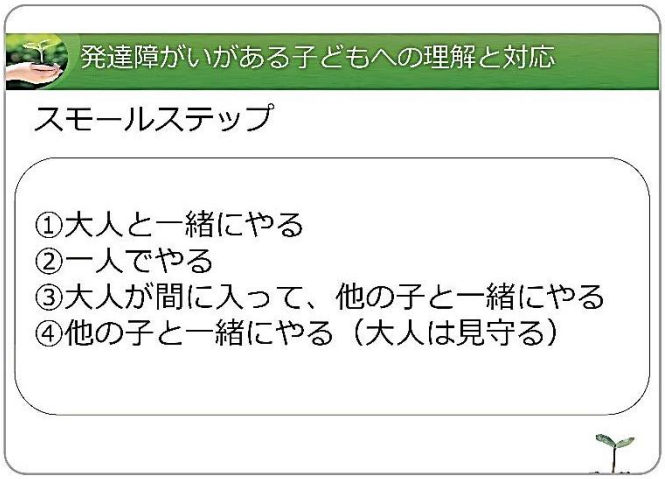
あとは伝え方ですね。これもすごく大事です。「先出し注意」はもちろんしながら、それでも子どもって間違ってくることは、もちろんあるんですよ。その時にどうするかっていうと、視覚的な補助は先ほども言いましたけど、あとは、指示は短く。さっきの学習障害の女の子が、いっぺんに指示されても、覚えきれないと思う、って言ってました。指示は短めに、3 つも 4 つもいっぺんに言っちゃうと、なかなか記憶ができない子たちが多いので、短めに言ってあげてください。あと、簡潔に。あとは、そもそも伝わっているかを確認する。これもすごく大事です。

先生たちは短く言っているんですけど、伝えたつもりなんですけど、子どもって違うふうに思い変えている時があるので、言うだけで安心するのではなくて、一回ちょっと確認するというのもすごく大事です。それを CCQ っていう考え方でよく紹介されています。C(Calm)おだやかに、C(Close)子どもに近づいて、Q(Quiet)静かにゆっくりと話す。伝える。これを大きな声で言っちゃうと、先生は良かれと思って、ダメなものはダメだから伝えようと思って大きな声で言っちゃうと、特に聴覚の過敏さがある人、子だったら、大音量に聞こえるわけです。先生の言っている内容まで、頭に残らない。なので、子どもに伝えようと思ったら、おだやかな声で、子どもに近づいて、ゆっくりと話してあげる。これがすごく大事。

ちょうど今夏休みですよね。教えている子が障害のある方でも過ごしやすい世界、そういうバリアフリーのポスターを学校で描かなきゃダメで。僕は何も言ってなかったんですけど、お母さんからメールが送られてきて、何だろうって見たら、これ、僕だそうです。これ吹き出しが上に書いてあるんですけど、僕が最初言葉だけで言っている。下の子どもはハテナマーク、解んないよって顔してるんですよね。これは僕が普段、やっている事なんですけど、黒板で、絵がこれやるんだよ、これやるんだよって、図示している。そうすると子どもはわかったよって顔をしているポスターを作ってくれたんです。これは非常にうれしかったです。僕がやっていることが伝わってるんだなって。非常に嬉しかったですね。こういうことをするっていうのがとっても大事です。何しろ、それをわかってくれたっていうのがうれしいですよね。ちょっと今回、挙げてみたんですけど。

あと、もう一つ。スモールステップ、これもすごく大事になってきます。勉強のスモールステップ、よく言われますが、行動のスモールステップを今回取り上げました。みんなと同じことをやるのが苦手な子ってけっこういますよね。一緒に遊べなかったりするんですよね。その時に、僕ならどう組んでいくかっていう一例を今回お話をします。

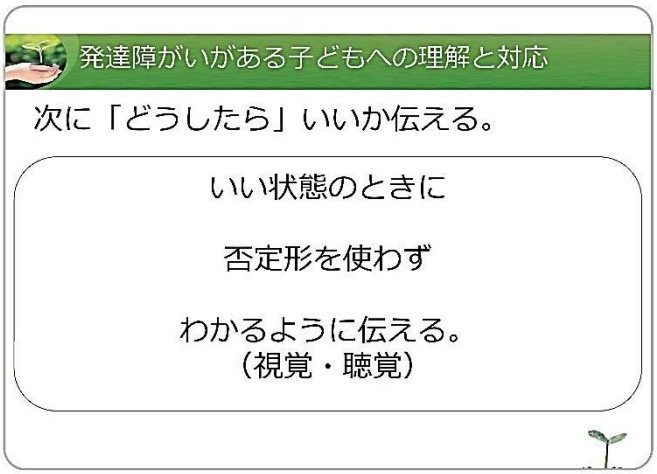
あの子たちは、子どもにもよるんですけど、みんなと同じっていうのが、非常に苦手だったりするんですよ。その同じっていうのを減らしていくんです。あ、ごめんなさい、一旦減らして、その後、増やしていくんです。どういうことかっていうと、この同じ要素は、



時間が同じ、場所が同じ、やることが同じ、3 つの同じがあるわけです。この 3 つの同じを同時に課せられると、非常にしんどいわけです、その子が。同時にやるのが苦手。みんなと同じにやるのが苦手。だから、最初は例えば、この一緒にやる前に、同じ時間だけ同じにする。次に、同じ場所で、違うことをする。次に、同じことを最初は同じ時間、次に同じ時間と同じ場所、最後に３つの同じっていう、苦手な同じを分散させながら、子どもに課題をクリアさせる。プラスそこまでみたときに、まずは大人と一緒にやる。
次に例えばお料理もそうですけど、一人でやる。次に大人が間に入って他の子とやる。最後に他の子と一緒にやる。大人は見守り。そんな、みんなと一緒に遊ぶっていうのも、こういうスモールステップを踏んであげると、一緒に子どもたちは遊びやすかったりします。

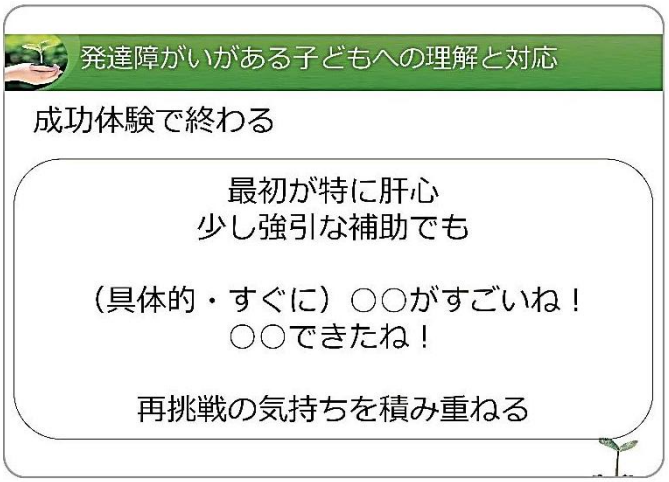
でもこれをやっても難しい子っていうのも、やっぱりいるわけです。それが、例えば、視覚的な敏感さだったり、聴覚的な敏感さだったりして、どうしてもそれが難しい子もいるんです。その時はそれを許してあげてほしいんです。例えば、僕、教えてる子の中で、ずっとうつむいている子がいて。帽子かぶってね。あと、勉強する時は、逆にすごく嫌そうな顔をするんです。何かなって思っていたら、その子、光の加減が、何ていうんですか、太陽の光がダメだったんですよね。みんなと外で遊べるわけがないんですよね。何で勉強の時嫌がっていたかっていうと、プリント、あれライト光って明るいでしょ。それが辛かったって。

ちょっと余談なんですけど、昔、僕の世代かな、わら半紙だったんです。あれに救われた子って多かったんだろうなって思うんですけど、今の紙って真っ白じゃないですか。光に過敏な子って結構しんどいですね。スモールステップを踏んであげるんですけど、難しかった場合は、それを許してあげる。どこかに引いてあげるっていう姿勢もすごく大事なんですけど。そうじゃないと、子どもは、僕ダメなんだって思っちゃうんで、そこは、ここまでやって無理だったら、「あー、いいよ、いいよ。」って言いながら、「他のことしようぜ！」っていうふうに、逃げ道を作ってあげるのもとっても大事です。



あとは、次にどうしたらいいかを伝える。これは、子どもが失敗した時なんですけど、その時に子どもが怒ってたりすると、「何こんなこと！こうしなさい！」って言っても伝わらないんです。子どもがいい状態の時を見計らって、「こうしたらよかったんだよ。」って言うのを伝えたい。否定形を使わず。「走らない」っていう否定形って描けないですよね。走っている子どもにバツをつける。絵にバツをつけないと、走らないっていう絵は描けない。イメージがしにくい子どもたちが多いので、走らないじゃなくて「歩きます」って言ってあげてください。そうすると、次どうしたらいいかわかりやすいから。走ると歩くを同時にできないので、次に何をするかということを伝えてあげながら、それを視覚的だったり、聴覚的に伝えてあげるっていうことがとっても大事になってきます。

あとはトライアンドエラーっていうのを、僕の場合、半年間繰り返すって言いました。今、僕が働いている学校の先生にいろいろ試していただいているんですけど、その時に先生たちにすごく言うのが、「初めが肝心ですよ。」ということです。半年間子どもは先生

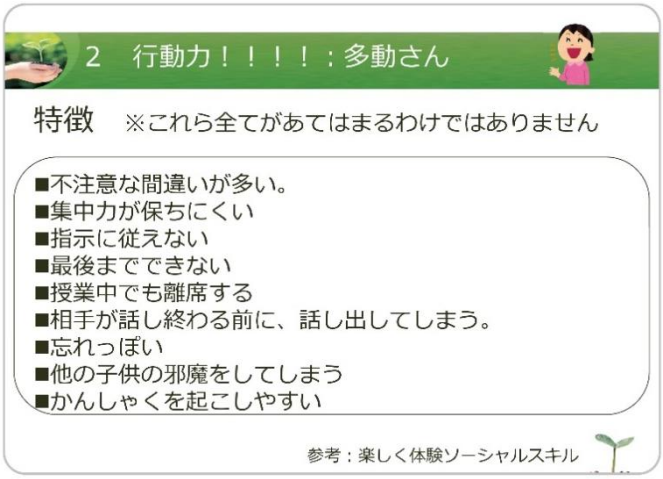


あとはトライアンドエラーっていうのを、僕の場合、半年間繰り返すって言いました。今、僕が働いている学校の先生にいろいろ試していただいているんですけど、その時に先生たちにすごく言うのが、「初めが肝心ですよ。」ということです。半年間子どもは先生と一緒ですけれども、いろんなトライをするわけですよ。うまくいかないこともたくさんあるわけです。ただ、「最初にちょっと強引なほど、体験を積ませてあげてね。」って言います。ずーっと失敗だと、子どもってしんどいので、なかなか続けられないんです。

だから、例えば字を書くときでも、うまく書けないなあ、っていう場合、僕は二人羽織みたいにして、子どもに手を添えながらでも「うまく書けたじゃん。」っていう字を作らせたりするんです。最初は、導入では強引なことも必要だったりします。あとは、具体的にすぐに褒めてあげてください。これは、すごく大事なんですね。何かを続けるっていうのは、やっぱりご褒美が必要なんです。心理学用語の「報酬」っていうんですけど、必要です。それは、他者の賞賛が一番効果的だと言われています。

「すごいね。」って先生が褒めてくれる、お父さんお母さんが褒めてくれる、っていうのはすごく大事なんですけど、すぐに褒めない人、特に学校の先生ですぐに褒めない方が非常に多いんですね。健常の子どもさんならいいんですけど、発達障害、またその可能性のある子は、なるべくすぐに伝えてあげてください。関連性を意識するのがちょっと難しい子たちが多いんです。心理学でもよくあげられる例を言うと、A のボタン、B のボタンがあって、A のボタンを押すと、すぐ 100 円が出てくる。B のボタンを押すと、すぐ 1000 円が出てくる、っていうと、みんな B のボタンを押しますね。すぐ出てくるんだから。じゃあ A のボタンを押すと、やっぱりすぐに 100 円が出てくる。 B のボタンを押すと、10 分後に 1000 円が出てくるっていうと、でもそれでも B のボタンを押す人が多いんです。じゃあ、A のボタンを押すとすぐ 100 円が出てくる。B のボタンを押すと、1 年後に 1000 円もらえるって言うと、「どっちがいい？」って聞くと、みんな「うーん」って言いながら、A のボタンを選択するんですね。あとになればなるほど、その行為ってちょっと薄れちゃうんです。

特に障害がある子っていうのは、すぐに褒めてあげるのが一番です。外国につながる子って言葉の面でもそうなんで、「あなたのこうこうこういう行動がすごいね。」って、具体的に褒めてあげると、子どもの学習意欲にもつながるので、ぜひぜひ具体的に早く褒めてあげてください。そうすることで、再挑戦の気持ちっていうのが積み重ねられる。要は、また頑張ろうっていう気持ちが芽生えてくるので、ぜひこういう対応の仕方をしてあげていただけるとありがたいです。



ADHD の子どもさんの特徴を挙げてみたんですけど、こんな特徴のある子が多いです。今までのは、どちらかというと発達障害全般、子ども達全般に対する関わり方だったんですけど、その中で、ちょっと細かめに、ADHD 注意欠陥多動性障害の子どもたちに対してどういう対応するかっていうお話をしてみます。特徴なんですけど、不注意だったり、あとは相手が話し終わる前に話し出してしまうとか、まぁ学校によくいる子どもたちのタイプの一人なんですけど、こんな特徴があります。ここに書いてあるんですけど、これら

がすべてあてはまるわけではなくて、やっぱりいろんな子どもたちがいるんですね。

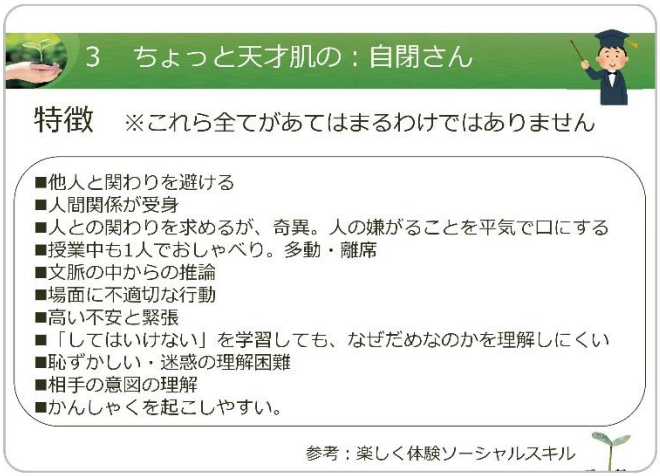
指示には従えるけど、すごく忘れ物が多かったり、注意欠陥多動性型の子どもたちもいます。そんな子どもたちをどうしていくかなんですけど、あくまでも 1 例なんですけど、「刺激の軽減」という行為が大事です。気が散りやすい子どもたちが多いんですね。席が窓際で、例えばチョウが飛んでいたら、そっちに視線がいって、いろんなことを想像しちゃうんですよ。その子たちは、先生の話なんて全然聞いてない。

ある研究者が言っていましたけど、「健常の子どもと ADHD の子どもって、実は気の散りやすさの回数は変わらないと思う。」っていうことでした。じゃあ何が違うのかっていうと、気が散っちゃったあと、戻ってくる時に、元に戻りにくいんですよ。ずーっとチョウの方を見ちゃうと、チョウのことばっかり考えちゃうんですよ。でも健常の子は、チョウの方を見てても、あっ、先生が話していたって思って視線を戻せるんですよ。そこの違いがある。どうしてあげたらいいかっていうと、そういう刺激が無くなる席にしてあげるといい。

よくあるんですけど、例えば、４時間目教えていると、その ADHD の子は黒板見ないでこっちばっかり見ているんですよね。なんでかなって思って、僕は授業をしているんですね。ここに給食の献立が貼ってあるんですね。「ああ、お腹へってたんだ。」って分かるんですよね。そうすると、ここにカーテンを引いてみたり、そうしながら、子どもの刺激を減らしてあげる。意識しても、どれだけ子どもを叱りつけても、ここは変われるものではないです。だから環境を変えてあげる必要があります。そのために、つい立てとかで、刺激を軽減してあげることが必要です。

あとは３年ぐらい前に学校で対応したケースなんですけど、６年生の子で、統計学ではないんですが、子どもの教室を飛び出す数を数えてみると、全体の授業の中の 80%授業を飛び出している子どもがいたんですね。どうしようもないって言われて。僕、外国につながる子どもたちの教室担当だったんですが、授業中に校長先生に呼ばれて行ったら、「どうしようもないから対応をしてくれ。」って言われて、僕が対応したケースなんですけど。何をしたかっていうと、その子に、エネルギーあり余っているのはわかっているので、「朝の会に出なくていいから、先生と一緒に走ろう。」って言って、体育館で、その子がへとへとになる前に僕が先にダウンするんですけど、へとへとになるまで走って、エネルギーを発散させてから、授業を受けさせることをしました。そうすると、０にはならなかったんですけど 80%が 40%ぐらいまで、減ったのかな。そうやってエネルギーを発散させてから、授業を受けさせるっていうのがとっても大事です。

僕も個人の家庭教師してるって言いましたけど、教える前に外走ろうとか、筋トレするぞっていうケースが実は結構ある。これは、姿勢が保ちにくい子に、ゴムボールをひざとひざの間に挟ませると姿勢が保ちやすいっていう例です。



あとは、自閉症スペクトラム障害の子どもです。基本的に、通常級にいる子どもを想定して話しているんですけど、子どもたちは社会性の問題が非常に強くて、

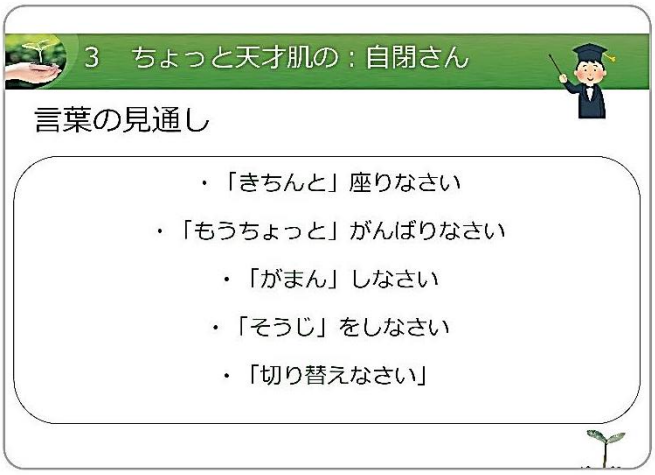
他者と関係を作っていくっていうのが非常に意義があるんです。こだわりが非常に強くて、他人には奇異な人物、ちょっと変わり者と思われちゃうケースが非常に多いんですね。あと、深い不安と緊張があるっていう特徴がある。

「スペクトラム」ってどういう意味なのかっていうと、連続体っていう意味があるんです。連続体ってどういう意味かっていうと、障害っていうのは、あるなしで、パキッと分けられるものではない。１，０で分けられるものではなくて、健常の子から障害のある子まで、ずっと連なっている。僕が今からしゃべるケースで、こういう行動があったら、「じゃああの子、自閉症スペクトラム障害なんだ。」って思わないでください。自閉傾向が高くても、クラスでうまくやっていける場合は、自閉症スペクトラム障害ではないわけで、いろんな傾向をそれぞれが持っているんですけど、自閉傾向が高い子は、よく学校の先生にこういいます。「先生、これ終わったら何するの？」って。よく言わないですか、先生このプリント終わったら何するのって。あと５分あるのに、「終わったら、何するの？」って言うんですね。なぜかというと、見通しが持ててないからなんです。次どうしたらいいかわからない時に、自閉症スペクトラムの子ってすごく不安になっちゃうんですね。それを、先生たちに怒られているケースが非常に多いんです。実は、自分の緊張を和らげるためだったりします。なので、不安感を少なくするっていうのが一番です。

僕がお勧めしているのは、予習ですね。外国につながる子どもたちの保護者にもよく言います。「予習大事ですから。」って言うんですね。予習のツールをお見せするんですけど。あとでちょっと時間があればお見せしようと思います。学校の先生として、家庭訪問をするんですが、その時にお父さんとお母さんにお願いしてパソコンを見せてもらって、勉強ができるホームページにいって、ここを勉強しておくように言いながら、お気に入り登録をするんですけど、そうやって、予習をさせやすくします。次にどんな授業をするかを予告しておいて、子どもが予習しておく状態が一番不安感が低い状態、何するかわかっているので、子どもの実力を発揮しやすい状態に持っていくことがすごく大事です。

あとは「刺激の排除」です。ここで大事なのは、ADHD の子は「軽減」なんです。なるべく減らした方がいいんですけど、自閉の子は、特に音や視覚が、非常に敏感な子が多いので、なくしてあげる方がいいです。これは広島の小学校の例なんですけど、イスと机の端のところにテニスボールが刺さってて、掃除の時に運ぶ時に、ガラガラガラってならないようにしてある。全校でしてあるんですけど、すごいなって思います。音の敏感さで、すごく苦手な子だったら、それがすごく大音量に聞こえたりするんですね。みなさん、黒板に爪をたててきーってするの、嫌じゃないですか。あの音、誰も訓練して我慢しようなんて思わないですね。自閉の子も聴覚的な過敏さがある場合、我慢するのって難しいので、その子が音によってパニックになってるなって、いろいろわかった場合は、その刺激をまずはなくしてあげること、または、逃げさせてあげることというのがすごく大事です。あとは、見通しですよね。今の授業で何するか、先生は今日この時間にあなたに何を教えるか、その内容と分量を最初に示しておいてあげてください。そうすると、先生これ終わったら何するのっていう質問、不安感をあおる事はないわけです。だから、こういう見通しの持てるものを授業中に貼っておきたい。最初に見せておいてあげるのが大事です。ぜひその時に、何問とか何分とか示してあげてください。

あとは言葉の見通しです。言葉の苦手さも持ち合わせている外国につながる子どもたちは、特に抽象的な言葉が苦手なんですね。「きちんと座りなさい」。「きちんと」ってどんな状態なのか、イメージしにくい子

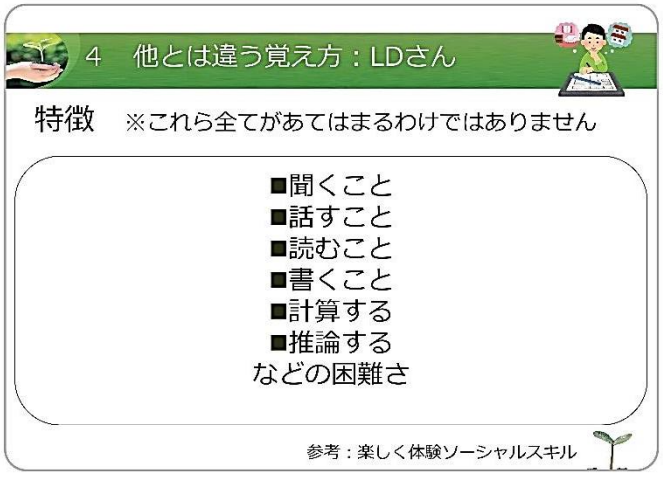


はできません。「もうちょっと」は言い手と聞き手で変わります。家でお母さんたちにアドバイスするんですけど、「もうちょっとでゲーム止めなさい。」って言う時のお母さんの「もうちょっと」って、あと５分で止めなさいぐらいの「もうちょっと」なんですよね。で、「はあい」って言った子どもの「もうちょっと」っていうのは、きりのいいところまでやるっていう「もうちょっと」なんです。言い手と聞き手との「もうちょっと」の感覚が違うわけです。だから、具体的に言ってあげる方がいいです。「あと５分で止めなさい」。ちょっと工夫することで子どもがびっくりすることがなくなるんですね。子どもたち、すごく熱中するので、「もうやめなさい。いい加減やめなさい。」って言われると、「お母さん“もうちょっと”って言ったじゃない。」っていうことで、グーっとテンション上がってパニックになっちゃうので、この辺の抽象的な言葉はなるべく具体的に表現してあげるっていうのがとっても大事です。

学習障害の子どもたちのお話をしますが、子どもたちは話していると普通の子で、IQ も低くはないんですよね。ただ学習する教科のどこかに、または複数が非常に苦手だったりします。そして、学習の困難さが出てきます。その子たちをどうするかですけど、学び方は多種多様で、その子の苦手さを理解しながら強みを活かして、あと弱みを理解しながら教えていくっていうのがとっても大事です。例えばですね、字の形を捉えるのが非常に苦手な子どもを指導する場合に、こんな間違いが多かったとします。「明るい」っていう字があって、右側が「目」になってた。ていねいな先生は、赤でこう書いちゃうんですよね。間違ってるよって。正しい字だよって。でも、形の認識が苦手な子どもって、こう書かれちゃうとどこで間違えてるかわからないんですよね。だから間違ってるところに、ダイレクトに赤で丸つけて、こうだよってやってあげた方がよっぽど分かり易かったりするんですね。

あとはこの視覚支援ですね。iPad ですね。iPad とかを使いながら子どもに教えていくっていうのが大事です。これも資料には載せてないですけど、ある子どものケースを見せていきますね。この子も学習の苦手さがあります。中２です。この真ん中のこれが平均です。クラス平均です。で、この子学習の苦手さがあって、この緑の、この時に僕が関わり始めたんですね。これだと平均よりだいぶ低いですよね。英語かな。で、教え始めたんですけど、この子は視覚的な暗記は非常に得意だったんですけど、聴覚的な理解、特に言語処理が非常に苦手な子どもでした。どうやって教えて行こうかなと考えて、お母さんに「半年くらいはがまんしてね。」って言いながら関わっていきました。

特に言葉が苦手なので、これ一学期の中間です。で、一学期の期末、二学期の中間、っていうふうに流れとしていってるんですけど、ここで関わりました。で、やっぱり言葉の苦手さがあるのでなかなか難しいんですよね。ここはこのまま、このままっていうのは変ですけど、漢字とかあんまり苦手なことは、ある種諦めるんですね。社会は視覚的な暗記は得意だったので、社会の暗記の部分で、いろんなやり方をさせたんですね。いろんな暗記のさせ方をしながら、子どもにどうやっていこうかっていう様々なトライをして、やっと子どもに合う方法が見つかった時にドーンっていうふうになるんですよね。



で、逆に進まない子もいる。やっぱり学習障害が多くてなかなか難しい。理科は、まあ社会と同じです。視覚的な暗記は得意だったので、ここを活かして伸ばしていこうと思って、まあ平均よりちょっと上になったのかな。英語はまあそれでも伸びてた。これもやっぱり、難しさを置いといて、置いといてっていうのは変ですね。フォローしながら得意なところを補強して伸ばしていく。半年後にこういう結果が出たよっていう例です。

これは資料にないですが、僕が去年見た事例の中でいくつかご紹介します。保護者のことも含めてここのケース、特徴的だったのでお話をしていきます。中学生の子どもです。学力が非常に低い。読み書きに苦手さが非常にあります。英語のワークでいうと、ｂとｄが反対になってたりとか、視覚的には認知が非常に難しい子どもで、筆記体のｂでよくこの子に相談されたんですけど、「ｂってこう書くでしょ。で、ここでこう、ぐるっと書いて、ここをどこに持っていっていいかわからない。」っていうのをよく子どもは僕に相談している。形を捉えるのが苦手な子どもです。で、いい所もあるんです。聞いて理解する力は割とあるんですね。お世話をすることが好きで、保母さんになりたいと。ジャニーズが好きな子で、書くこと自体にはそれほど抵抗がない。ただ、字は間違っていることは多いですけどね。苦手さでいうと、感覚の過敏さがあった。ここでいうと絶対音感があって、この子、聴覚がすごく鋭いんですよね。

これに気がついたのは、この子のことは小さい時から知ってたんですけど、定期的に関わるようになったのは中学生の時で、学習支援していこうかって話になって、じゃあ今までのテスト全部持って来てって言ってお母さんに持って来てもらっていろいろ見てたんですね。そうするとですね、ある傾向が見えてきて、英語のリスニングだけは間違ってなかったんですよ、ほぼほぼ。で、「あれえ。」と思っていろいろ聞いていくと、この子絶対音感保持者だったんですね。だから、いろんな音が気になっちゃうんですよ。授業受けていても、隣の歌が聞こえてきたり、誰かが書いてる音とかも全部ドレミに聞こえちゃうんで、音の洪水の中で生活している。

でも逆にリスニングは聴覚の過敏さゆえに強かった、っていう特徴を持ってたんですね。で、そのことをお母さんにお話をしたんです。「お子さん、もしかしたら聴覚の過敏さがありますので、絶対音感保持者ですよね。」って話をしたら、お母さんが「えっ、私もですけど。」って言われたんです。お母さんはそれが特別な絶対音感とか思ってなくて、生きてる人みんな同じだと思ってたそうです。みんなドレミに聞こえるんだと思ってたそうです。だから子どもの苦手さにも気づかなかったそうです。やっぱり特徴って遺伝するので、子どもの特徴を親が色濃く持っていることって結構あるんですよね。その分逆に理解が進まなかったりするんで、第三者が関わる、先生が関わるっていうのはとっても大事です。で、苦手なところは読み書きの苦手さだったりとか、いろんな苦手さがあります。

で、やったことですけど、学力をつけるっていうところは、まずは宿題提出して内申点を稼いでいく。あとは授業のノートをとっていく。あとは保護者、本人の自信の回復、っていうところに焦点を当ててきました。結果なんですけど、まず読み書きの苦手さがあると、非常にノートを書くっていうのが苦痛です。しんどいほどです。で、一回チャレンジしていただきたいんですけど、今鉛筆持ってる方、鉛筆の一番上を持った状態で自分の名前を一回書いてもらっていいですか。すごく書きにくいし、すごく疲れると思うんです。こういう感覚で書いてるのが学習の苦手さのある子なんです。しんどいですよね。これを一時間続けたらクッタクタになります。

ただ、難しいのが学校の評価って、やっぱりノート

とっていかないと評価もらえないので、その子がノートをとれるような課題を組んできました。どうするかって、まずは僕がチェックするときに、それについて「すごいね、あなたはよくがんばったね。」っていう、僕が価値づけていくことをしながら、この子がノートをとろうかなっていう気持ちになるようにもっていきました。多少間違おうが、それは僕は「オッケー、オッケー」と気づかないふりをしました。学校の担任の先生と連携をとりながら、「書けたことを評価してください。内容を考えるのは、ちょっとやめてあげてください。」って言いながら、その子がノートをとるっていう動機づけをするっていうことを課題として選定していきました。

あとはとったノートを、撮影会って言って、ビデオにとって子どもにプレゼンしてもらうっていうのをやりながら、ノートとってないとプレゼンできないですよね。説明できないですよね。聴覚が得意なので授業は聞いてるんですよ。だからただ書くのが苦手なので、聞いたことを説明するっていう撮影会をしながら子どものノート書きの動機づけをやっていきました。というのがこのケースの例です。いい意味での諦めは、難しさが特に出やすい社会とか、社会って非常に難しいのでそこらへんは、その子にトライさせても、ちょっと自信を奪っちゃうだけなので、そこに関してはちょっとスタンスを緩めながら関わっていきました。

でまあ事例２、事例３と続くんですけど、さっきの子どもこれですね。学習障害の子で、社会が 86 ですね。でこれは、この子は言語的な理解、さっきと逆なんですよね。さっきの子は聴覚得意だったんですけど、この聴覚が苦手なんです。理解するのが苦手だったので、話す音量を調節しながら、長い説明は本当に伝わらないので、短い説明をしながら簡潔に指示をして、えっと、あと自閉傾向も高い子なので決めてあげるとその習慣をずっと続けられる特徴を持っていたので、それをしながら点数を伸ばしていったというケースです。

あとは、このケースを最後にお話して終わります。この子は小学校低学年の子どもです。コミュニケーションが苦手でこだわりが強い子どもです。お母さんは発達に関してすごく不安感があったので、関わっていきました。肯定欲が非常に強い。要は「関わってほしい、褒めてほしい。」っていう欲求が非常に強い子なんですね。新しい環境が苦手で、自己表現が苦手、他者に自分のことを説明することが苦手だったりします。特に、コンビニに行きたい、学校が終わった後にお母さんと一緒にコンビニに行きたい。なのに、行けなかった場合、パニックを起こすので、お母さんが困っているわけです。「主人と召使い」って言ってますけど、お母さんと子どもの中にも相性っていうのがあって、勝気な子どもとやさしいお母さんというのは相性が悪い。子どもが癇癪をおこすと、お母さんが従うっていう関係性になりやすいケースなんですね。

そういう時に、僕は関わりました。何をしたかっていうと、療育の時間を学校の最初の月曜日に設定して、週の始まりの月曜日にコンビニに強制的に行けないっていう時間を作ったんですね。一番行きたい時に行けない、その時に、専門家の関わりとして僕が行く中で、行かなかったことを価値づけていく。コンビニに行く、癇癪を起こすっていう一連の流れを消していくっていうことをしました。すると２週間くらいで、コンビニに行く、癇癪を起すっていうことがなくなりました。

あと５分だけいいですか。すみません。最後にちょっとだけ、iPad でどんな勉強をしているのかっていうのを見せて、終わりにしたいと思います。最近よく、障害のある子どもと会話するときに、お金とテクノロジーが使えるっていう話を聞きます。僕は iPad を使って教える方法を使っています。いくつか教材をお見せしたい。ソフトが無料だったり、ちょっと有料だっ

たりするんですけど、使いやすいものをお見せします。カタカナって書いてある右上のアプリが、非常に使いやすいソフトです。これは無料です。これは無料だからこういうCMが入っちゃうんですけど、これは置いといて。これは「あいうえお」がパズルで「あ」を持ってきて、プラス「く」を持ってきて入れていく、っていうアプリです。プリントの課題では、音声と文字を結びつけるのが難しいじゃないですか。学習障害のお子さんたちって、そこが難しかったりするんです。そこを結びつける課題としては、使いやすいです。プリント教材でもすごくいいものがあって、工夫していくのがすごく大事だと思うんですけど、こと、音声っていうのが必要だなと思った時に、こういうコンテンツがあります

あと、こんなの。これも有名なので知っている方がいらっしゃるかもしれません。「にわとり」って言いながら、手探りで単語を入れて行く。こうすると言葉の勉強にもなりますし、字の形を覚えていく練習にもなります。よく外国につながる子たちにお勧めだよって、保護者の方に言ってるんですけど、「地図エイリアン」っていうもの。真ん中の２番目なんですけど。これ、非常に面白い。日本地図を覚えてない子たちみんなに伝えるんですけど。このアプリのいい所は、リズムに合わせて勉強できる。非常に面白いです。

もう一ついいことあって、さっき僕、障害の名前にこだわらず、子どもが勉強しやすい方法を見つけて教えていくことがすごく大事だよって話をしたんですけど、さっきの課題、地図エイリアンのアプリって、子どものやり方を見てると非常におもしろいんですね。さっきの問題、大阪、兵庫、京都の順番で課題が出されて、それを覚えて順番に押していかなくてはならないんですけど、視覚的に覚えるのが得意な子って、キャラクターがぽんぽんぽんって出てくるところをすごく暗記しているんですね。あ、この子視覚的に覚えるのが得意なんだって、そこのところで分かります。逆に、視覚的に覚えるのが苦手で、聴覚的なことが得意な子は、案外iPadなんて見てなくて、大阪、兵庫、京都って音声だけを気にしてるんです。そうすると、子どもの学習プロセスが分かってきたりするんです。そういうところをちょっとチェックしてみると、勉強を教えるヒントになったりするので、お勧めの教材の一つです。

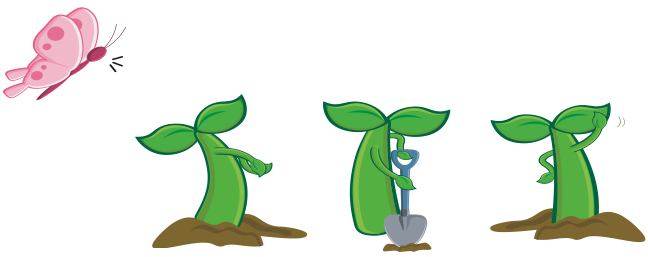
ごめんなさい。ちょっとオーバーしちゃってます。一番大事なテクニカルな話を30分くらいしちゃったんですけど、一番大事なことって、待ってあげることと肯定してあげることだと思うんですね。それをしながら、子どもの苦手さをちょっとフォローしながら、得意な所を伸ばしていく。さっき言った外国につながる保護者の方に説明をどんどんしていくアプリとかって、ブラジルのアプリもあるんで、いろんないい教材があるよって、お父さんやお母さんに教えながら勉強していって、アプリの良いところは、正誤判定が付いているところです。お父さんとお母さんでもわかるんですよ。子どもが間違っていたか、合っていたか、わかりやすい。そういうことをしながら、お母さんとお父さんと一緒に勉強を、勉強じゃないな、その子のフォローをしていくというのがとても大事になっていきます。もしよかったら、ホームページとか見ていただけると、こんな活動しているんだなって、わかってもらえると思うんで、興味があったら、「こういう子どもがいるんですけど、どうしたらいいですか。」ってメールいただいても結構です。答えられる範囲で答えさせていただくので。ぜひぜひ質問なり、していただければと思います。

ここに、「かかりつけの専門家」ってこと書いてあるんですけど、日本人の子どもたち、外国の子どもたちも含めてですけど、お母さんお父さんたちには、なかなかこういう相談できる場所がない。それが社会的な課題だと思います。みんなが子どもからの発達を経て大人になっていく。みんなが通る道なのに、発達の

専門家、すぐ相談できる人がいないっていうのは、今の日本の社会的な課題だと思います。ただ僕みたいな人が地域に何人かいて、子どもがちょっと困ったなっていう時に、さっきのコンビニのケースもそうですけど、ああいう時に病院だとハードルが高い。でも、あの先生に聞けば、何かしらアドバイスくれるかもっていう人が、日本全国増えて行くことが一番理想かなと思っています。ホームページを見て、共感できるって思っていただけたら、応援とかもしていただけると嬉しいです。はい、じゃあここで終わりです。ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。いろいろと事例を踏まえて、わかりやすくお話いただきました。休憩なしで進めたいと思いますが、よろしいでしょうか。では引き続き、「子どもたちの未来を共に描こう」というテーマで皆さまからのご質問を先生にお答えいただきながら、考えていきたいと思います。当館館長の林田が進めて参ります。よろしくお願いします



■第二部　参加者との意見交換

「子どもの未来を、ともに描こう」

ファシリテーター：林田 育美

都筑多文化・青少年交流プラザ（つづき MY プラザ）館長

【館長】

先生、ありがとうございました。皆さんいかがでしたでしょうか。先生の優しさが伝わってきたというか、最後尾に私はいたんですけれども、ずっとうなずきながら聞かせていただきました。あと 30 分程度ありますので、ぜひ質問などありましたらご発言ください。今回は学校関係の方ですとか、支援者の方々など、色々なお立場の方が来てくださっています。ざっくばらんな意見交換を、先生も交えて参加者皆でしていきたいと思います。どなたか、感想でもいいので、口火を切っていただける方いらっしゃいませんでしょうか。

林田 育美 館長

【質問者１】

今日の話の中で、学び方が違うってことを、どうやって外国につながる子どもの保護者に伝えたらいいのかということが、ちょっと私の中で、まだうーんって思っているところがあります。あと、たぶんそれは通訳の方の問題もあると思うんですけど、国によって学び方が違うっていう前提もあったり、教育観が違うとか、そういうところで学び方が違う。別に特別支援でやるっていうわけじゃないって思っていても、なんかやっぱり外国につながる保護者が、その障害をどうしても受け入れられないっていうか。国での考え方が違うから、っていうところに、どのように清長さんはアプローチをしていらっしゃるのかを教えていただきたいです。

【清長先生】

学び方が違うっていうのと、学習障害だっていうのはイコールではないんですね。で、何でしょう、保護者の方に学習障害だから学び方が違うんだよっていうような言い方は実はしないです、いろんな専門家が同じことを言うと思うんですけど、外国につながる子どもが発達障害か否かっていう判断は、すごく難しいんですよね。なので僕自身も、子どもにこういう勉強してるんだけど、ちょっと難しいからお母さん iPad 持って来て、こういうアプリ入れておくからこれで勉強してみようか、とか、いろんなやり方を提示するんですね。で、面談しながら、あ、こういうやり方じゃ難しかったからお母さんこれでやってみようかっていうようないろんなアプローチの仕方をしていく。で、ここでうまくできたから、お母さんこのやり方、合うかもしれないよっていうのを、通訳の先生を通じてお話をしていくっていうことをずっとしてるんですよね。受け入れさせるのは病院の先生の仕事で、そこは僕の仕事ではないので、そこの学び方の提示をしていくっていうのがすごく大事なのかなと思います。

【質問者１】

病院につなげるってことですか？

【清長先生】

病院につなげるケースはもちろんあるんですけど、僕の仕事は子どもの学び方の提示をすることなので、

いろんな学び方をやって勉強していこうか。で、病院につなげる、つなげないは学校の方針だったりいろんなことが関わってくるので、そこは僕が判断することではありません。いろんなバリエーションがあることを教える。そこがまずは大事かと思っています、支援者の一人として。で、まあ病院につなげる、つなげないは、学校がこういうスタンスでいこうって決めてそこに専門家が関わりながら保護者の方に説明していく、っていうところが大事なので、でもまあ、いろんな状態を知りたいから、発達検査とかも必要かもしれないから病院に行こうねっていうだけで、障害があるのか否かっていうのは病院の先生の役目で、そこは言わないで話をしていくっていうことはやってたりはします。

【館長】

今最初にご発言いただいた、一つの問題提起に関して皆さんご意見があれば、いかがでしょうか。学び方が違うということと、学習障害とは違うということを先生はおっしゃいましたけれど、特に外国人の保護者に対して子どもの状況をどのように伝えるか、どのように理解してもらうかっていうところは本当に難しい課題だと思います。そもそもその子どもが発達障害なのかそうじゃないのかっていう、その判断すらも難しいと思いますので、もしかしたら正解も当然私たちにはわかりませんし、だけど寄り添う者としてどういうふうに対応していけばいいか、考える観点としていろいろあると思うんですけれども、どなたかご意見がおありの方、あるいはご経験で何かお話しいただけるようなことがありましたら、いかがでしょうか。

【質問者２】

具体的なことから述べさせていただきたいんです。私八王子っていう東京の西部で活動しています。最近は親は例えばブラジル生まれ、だけど多くの場合子どもは日本生まれです。ですから日常会話には問題ないんですけれども、みなさん当然のごとく学習言語能力は非常に不足しています。それで、どうやったらいいかといろんなことをやっているんですけれども、どうも親があんまり日本語できない。子どもは日本で生まれてますから、３才か４才のころの、どうも絵本の読み聞かせとか、そういうことがゼロだということが判明しているわけです。そういうことで、何か学習言語能力を向上できないかというので、３才か４才のころの絵本の読み聞かせっていうのを、周りの人々、例えば私とか他の人々がやってるんですけど、この３才か４才のころの絵本の読み聞かせと学習言語能力の関係っていうのは何らかの形で研究結果ってあるんでしょうか。

【清長先生】

はい、えーと、３才４才のときの読み聞かせ、ちょうど言葉を学んでいく年齢なので非常に大事だっていう研究があるんですね。ただその、日本で生まれて日本で育った子で、保護者が読み聞かせをするときに母語なのか日本語なのかとか、いろんな複雑な関係がある中での研究っていうのは、僕自身は知らないです。ただ、やっぱり学習面で言語能力が関わってくるっていうのは非常に大事です。あと、やっぱり先ほどの話とはちょっとずれるんですけど、母語が育たなかったら日本語難しいっていう研究もやっぱりあったりして、だから小さい頃の学習言語能力っていうのは、とっても大事になってくるのかなと思います。

とはいえ、目の前にいる子たちを育てなきゃならないので、そこに関しても課題があります。だから、３才４才の子どもにその読み聞かせをすることは、唯一の方法ではないけれど、大切な方法だと思います。僕の周りでも、愛知県でも、何人かそういう活動をされている方がいらっしゃるんですよね。ただ目の前にいる例えば３才４才を越えた子どもたちをどう教えていくかっていうところで言うと、母語で教えるとかじゃなくて、言葉をかみ砕いて教える、皆さんよくされていると思うんですけど、やさしい日本語で伝える。「宿題を提出する」じゃなくて「出しなさい」という言葉に変えるとかですよね、二字熟語じゃなくて。

もう一つは、学習のときに書いてるだけじゃ言葉ってなかなか覚えられないんですよ。そこがやっぱり難しいところで、例えば外国につながる子どもたち、特に初期だなあと思った子ども、立った時に「あ、立ったね」とか言葉にしてあげるんですよね。「鉛筆持ったね。持ったね」。これって、お母さんが小さい子に言葉教える時の教え方の一つなんです。ハイハイしたら「ハイハイしたね。」っていう子どもの行動を全部言語化していってあげるっていうのはとっても大事なので、それを意識していくこと。あと、それこそ、テクノロジーだと思うんですけど、アプリもそうですけど、塾の授業をユーチューブであげている先生とかがいらっしゃるんですよね。「とある男が授業してみた」で検索してみるとすぐ出てきます。有名な方なんですけど。知っている方もいらっしゃると思います。それだと場所を選ばない。家でそういう授業動画を見て、勉強をしてもらうっていうケースも、いくつかあります。

【館長】

ありがとうございます。外国につながる子どもの場合は、日本人の家庭だったら、幼児期に経験したと思えることが、絶対的に少ないと私も感じます。そのひとつが読み聞かせかなと。例えば、保育園、幼稚園などでも、あるいは家庭でも、読み聞かせっていうのは、本当に一般的になっていますが、その経験をせずに、日本生まれの外国籍の子どもたちは大きくなっている。そういう経験値がすごく少ない。学習補習教室の中でも、ボランティアの方が、大きくなった子どもに対しても、紙芝居や読み聞かせをしてくださったりしています。そうすると、きれいな絵を見て、少し年齢が大きくなった子で、内容がわかることが嬉しいということも、あるかと思います。他の皆さまは、いかがでしょうか。

【質問者３】

学校の仕組みとしての支援学級がございますね。その支援学級の外国籍の児童への対応の仕方として、だいぶ前のことなんですけど、とても疑問に感じたことがあります。支援学級の担当の方が、専門の方でなくて、ある程度研修を受けられてのことだから仕方がないのかもしれないんですけれども、ペルーでしたかしら、外国から来た子が支援学級相当とされて、通っていたんですけど、本人が非常に抵抗がありまして、そのうちに自分から勉強するようになって、私と他の会の方で、とても熱心な方がいて、これだけ勉強しているのだから、将来高校にはいって大学に行かせたいと。やはりこれは、支援学級相当ではなくて、やっぱり言葉とか外国から移住したことのショックとか、そういうことが支援学級相当と認められたんじゃないか、それは、違うんじゃないかと言うことを、本人からも、こちらからも学校の方に言いました。

でも学校の担当の方が頑として受け入れてくださらなくて、この子は無理ですと。本人が大学行きたいって言ったら、「あなたは大学行くなんて、ダメなんだよ、できないんだよ。」って、言われて。実際に勉強したものを持って、学校に行って、校長先生にお願いしたんですが、「支援学級相当であって、養護学校に行きなさいと。これは無理だ。」と言われて。本人が先生の意に反して、定時制高校に入って勉強するようになったんですけど。こういう外国籍の子どもの言葉の問題とか、それから、移動する時のショックっていろいろありますよね。そういう判断が間違ってというか、難しくて支援学級に入って、一度入ってしまうと、そのあと自分の希望で変われないのかと。そういう対応の仕方に疑問を感じたことがありますので、ちょっとそこをお聞かせください。

【清長先生】

はい。出られないことは無いんですけど、出られないことって言ったら変ですけど、出ることはあります、もちろんですが。学校が「出られないよ。」って言っても、保護者の方と子どもの気持ちが、希望と沿わない場合に出ることは、もちろんできるんですね。多く

の学校でそういうケースって、実はちょこちょこ聞かれるケースでもあります。原因は何なのかって、学校によっても違うのでわからないんですけど、そういうことを防ぐために一番大事なのは、いろんな大人がもっと連携をして関わっていくことが大事かなって思うんです。

僕も、僕一人で頑張ったってやっぱり難しくって。さっきのケースですが、保護者と関わって理解を深めてもらいながら連携していて、学校とも連携していて、三者面談とか四者面談とかにも同席するんですね、僕の場合。そうしながら、連携を密にしていくんです。なので、どこかだけが頑張っちゃうと見方も偏っちゃうので、「この子は高校無理です。」って言っちゃうケースってやっぱり出てくる。いろいろなところが、医療も含めて連携していくっていうのが、とっても大事かなって思っています。

あと、先行事例ですよね。学校の先生たちに、僕も学校の先生なんであれなんですけど、こういう先行事例がありますって言うと態度が変わることが多いので、そこはそういう事例も踏まえながら、大学に行くのが難しいよとか、特別支援学校しか難しいよって子が、そのあと大学とかに行くケースもやっぱりある訳で、そういう所をちょっと例に挙げながら説得していくっていうのがすごく大事かなって思っています。

あと、ごめんなさい。１ケース、さっき言うのを忘れたんですけど、外国につながる子どもたちって、幼児期の体験が少ないって話しあったじゃないですか。よく言うんですけど、現代の子どもたちって、外国の子たち以外でも共通する部分で、経験が少なくなっているのが気になっているんですけど。鉛筆の持ち方が非常に難しい子が多いんですよね。鉛筆を持つ手の、ここの筋肉がすごく痩せている子どもが多いんですよね。これはなぜかっていうとですね、これって、個々の指を使わないと筋肉がつかないんですけど、砂遊びとか、外で「うんてい」をするとか、ああいう運動でつく筋肉なんですよね。悪いところといいところがあるんですけど、今の子たちって、どうしたって iPad とかで遊ぶ子が多いんですよね。iPad とかで遊ぶと、小指と薬指って添えるだけなんですね。動かすのって、人差し指と親指だけなんです。そうすると、鉛筆を持つときですね、この、ここの筋肉が膨らんで、持つときにグリップとして膨らまないと、書くときに弾力を持って書けないんですよね。指だけで、ぴんぴんぴんって書いちゃうことになるんですよね。そうすると、字が汚くなってバランスがとりにくくなる。上手く書けないから、つい子どもたち、どうするかっていうと、普通はこうやって持つんですけど、だんだん内側にこういくんですよね。次にこうなると見えないから、こうやって書くんですよ。そうすると、どんどん姿勢が悪くなっていくんで、国籍関係なく、よく言うんですけど、お母さんとかお父さんに、「外で遊ばせて！それがもし難しかったら、こういう動きをさせて！」って言って、ここの筋肉を鍛えます。これは、現代の習慣の乏しさですけど、そういうところもちょっとアドバイスするといいかなって思って、お話しました。

【館長】

ありがとうございます。もう、ひとりふたり。いかがでしょうか。はい、お願いいたします。

【質問者４】

いつもこちらでお世話になっております学校関係なんですけれども、うちの学校でも通訳の方を派遣していただいたり、お世話になっていて。今日の講演の題名を聞いてぜひ聞きたいなと思って、今日は伺わせていただきました。いっぱい質問したいこととかあるんですけれども、なんか整理がつかなくて、全然手が挙げられなくて、皆さんの話を聞きながら、ああそうだなと思うことがいっぱいありました。でもやっぱり、どうしても学校だと、一番最初に質問された方みたいに発達障害なのか、それとも外国の文化とか言葉の壁による障害って言ったら失礼ですけれど、それによるものなのかっていう、そこがなかなか判断がつかなくて、そのままになってしまって、不登校になっていったり。逆にそのお子さんが日本にずっとこれからいて、進路を考えていくのであれば、やっぱり先ほどの、進学の問題とかいろいろ出てくると思うので、そこの支援をどうしたらいいのかなって、いつも迷うところです。

外国から来たおうちの方っていうのは、私が知る中

では、出稼ぎで来られる方が多いので、結局子育てというよりは、お金のことを第一として日本に来ることが多い。となると、お父さんが途中でパタッといなくなっちゃったりとか、子どもの面倒まで見られなくて働きに行くことで精一杯だったりとか、逆に今、お仕事がなくて生活が大変みたいな、そういう状況の外国の方をたくさん見てきたので、日本に住んでいる間にも、いろんなことを抱えるのは大変だなと思うんです。お子さんがそういう状況だとやっぱり普通の日本人の方もそうなんですけど、発達障害だとしたらおうちの方も、多少なりとも遺伝的な傾向を持っていらっしゃるので、保護者の方の理解を得るのも、どうしても日本人以上にすごく難しいと思っているんですね。

進路のことも話したかったりとか、今できる支援をどこまでできるのかなって話をしたくても、どうしても言葉の壁とか、勉強というよりは生活のことでいっぱいだと、それどころじゃないってことで、話し合えないっていう、そういうところもあるので、どこまで支援したらいいのかなっていうところが、いつも疑問に思っているところです。それと、知識として知っておきたいことが２つあって、例えば、外国の方の発達障害っていうのを、他の外国では、先進国ではない国から来られる方もいっぱいいると思うんですけど、そういう方っていうのは、理解されているような問題なのか、そういうことを話してもわかるのかなっていうことを知りたいということと、例えば日本で完全にそういうことを疑っていて、ちゃんとした機関でしっかりと支援をした方がいいなっていうようなお子さんがいた場合、言葉の壁の問題で、お子さんが大変だった時はそういう機関があるのかとか、そういうのを知識として知っておきたいので、教えていただきたいと思います。

【清長先生】

ちょっと最初に大前提なんですけど、ごめんなさい、この講演のお話しをいただいた時に、打ち合わせをさせていただいたんですね。その時に、全然メモを取らなかったですよね。いつも誰かと話す時に、メモを取らないんですよね。最初に僕言うんですけど、聴くのと書くのと同時にするのって、僕苦手なんです。だから、必死で聴いて後でまとめるんですよ。僕は健常者として生きていますけど、いろんな苦手さってみんなそれぞれ実はあるんですよね。

さっきの ADHD とか。ああ私そうかもって思われた方、何人かいらっしゃると思うんですけど、そういう特徴があるんですよね、それぞれの。すみません。恐らく僕、質問が全部覚えられていないです。覚えられている範囲で答えて、またちょっと教えていただきたいんですけど。国によって、って話を先ずしておくと、日本でもそうなんですけど、都会と田舎で、あと年齢によっても障害の捉え方って全然違ったりするんです。それは、国でも同じなんですよね。ブラジルでも、すごく知っている保護者の方いれば、全然知らない方もいらっしゃるんで、国による傾向っていう意味で言うと、ちょっと難しい部分もあります。

今まで関わってきた中で言うと、フィリピンの方は、少しそこのところの知識を知らない方が多いのは確かです。あとは、その辺に関して大らかなのも確かです。大丈夫だよっていう方も多い。あと、遺伝的なものもあるので、「私等はそれで生きて来たから大丈夫だよ、先生。」っていうのが多いのも事実なんですよね。だから、そこは、国によっても地域によっても年齢によっても、日本と同じで、理解に違いというか、そういうのもあるなっていうふうに感じます。ただ、共通するのはやっぱり、子どものことを心配しているっていうこと。やっぱりどんな家庭も一緒なんで、その家庭のできる範囲で、経済的に難しいのであれば、高い学習塾じゃなくて、日本でも同じですよね、経済的にマッチするような学習する場を探してみる。地域の中に必ずあると思うんですよね。そういうのを探して、家庭に提案してみるっていうのを、僕自身学校の中でやっています。マッチするのは何だろうって探すと、案外出てくることなんで、ちょっと探してみるの

は手かもしれないです。すみません、後聞き漏らしているのは何でしょう。

【質問者４】
日本で暮らす外国の方の発達障害があるお子さんや、児童、生徒さんの、何ていうんですかね、機関みたいなのってあるんですか。

【清長先生】
関東だとどこだったかな、横浜発達クリニックだったかな。病院の名前は地域が違うので覚えてないんですけど、田中さんっていう方が勤められている病院であれば、外国につながる子どもたちの対応をよくされているので、そこに関しては、よく相談に乗ってくださると思います。病院名を忘れちゃったんで、あとで言っていただければ、こういう病院でしたって、報告できます。連絡ください。

■おわりに

【館長】
はい。ありがとうございます。ここでも診断が必要になった時に、通訳派遣の相談に乗ったりしています。それからさっき先生がおっしゃった、国籍によってどうかっていうのも、ここでも似たようなことがあるんですが、同じお答えになるんですけれども、フィリピンの方はとても大らかだと思います。発達障害という概念を持っておられない方が多いような気がします。ただご家庭によって違うでしょうし、地域性もあるかと思います。それによって認識の違いが生じるような気がします。ですが、これからもずっと日本で生きて行くということを決めている家庭はとても多いので、子どもの将来を考えた時に、適切な対応が何なのか、私たちも気になるところです。今先生のお話にもあったように、可能な限りの連携っていうのは必要だと思います。というか、これがなければ進まないのではないでしょうか。時間がきてしまいました。皆さん、もしかしたら、もっとお聞きになりたいことがあったかもしれません。お話を聞きながら、整理ができた部分もあったかもしれませんが、ちょっと消化不良になった方もいらっしゃるかもしれません。

最後になりますが、今回このテーマを設定したのは、普段の活動においても、とても難しい課題だったんです。テーマを設定して、たどりついたのが清長先生でした。ただ、本当にご縁がありまして、何年か前のセミナーに来ていただいた先生とのつながりを持っておられて、今日を迎えることができました。学習支援をしながら悩むボランティアさんがたくさんいらっしゃいます。地域は専門家集団ではないものですから、答えをなかなか見つけられません。だからこそ、こうやって学ぶ機会を作ったり、先生方と協力させていただいたりというのが、子どもにたちにとって、その家族にとっていいことなのかなと考えています。本日は、ありがとうございました。

【司会】
はい、ありがとうございました。４時を少し回りましたが、とても内容の濃い２時間だったと思います。
ではこれにて、29 年度多文化共生セミナーを終了いたします。それでは、最後になりますが、貴重なお話しをいただきました清長先生に、今一度、大きな拍手をお願いいたします。本日はありがとうございました。

発　行　　つづきＭＹプラザ（都筑多文化・青少年交流プラザ）
〒224－0003　横浜市都筑区中川中央 1-25-1
ノースポート・モール　5 階
TEL: 045-914-7171　FAX: 045-914-7172
URL:https://tsuzuki-myplaza.net/newhome/
発行日　　平成 30 年 3 月 28 日
編　集　　つづきＭＹプラザ（都筑多文化・青少年交流プラザ）